

令和5年度 地域ケア個別会議(個別事例検討・課題抽出型)開催結果

開催回数	開催年月日	地区	会場	出席者	個別ケースの概要(テーマ)	個別事例への対応及び検討から抽出された課題
第1回	R5.5.23	小佐野	小佐野地区生活応援センター3階大ホール	民生委員、県立釜石病院退院支援看護師・医療社会事業士、せいてつ記念病院医療相談員、薬剤師、仙人の里居宅CM、小規模多機能ホームやかたCM、釜石厚生病院相談員、はまゆり在宅介護支援センターCM、釜石・遠野地域成年後見センター所長、生活支援Co、包括ケア推進本部職員、応援センター所長・保健師、包括スタッフほか 計22人	<ul style="list-style-type: none"> ・93歳(男性)1人暮らし 要介護2 ・令和5年1月まで妻と2人で暮らしていたが、夫婦で体調を崩し、別々の病院に入院となった。 ・長女は行方不明であり兄弟姉妹や地域との関わりも希薄であった。 ・対象者は退院を検討する際に施設入所を強く勧められたが、帰宅願望が強かったため、自宅に戻って生活することになった。 ・自宅での生活をスタートさせた対象者であったが、金銭管理や家事全般を妻が担っていたため、在宅生活は困難であった。 ・今まで関わりを持っていなかった妹、ケアマネ、ヘルパーがサポートを行っているが、便失禁、尿失禁をそのまま放置したり、衣服を着用しないまま過ごしたり等の問題行動が増えている。 ・対象者への支援を継続させていくためにはどのような関わりを持っていけばよいか。 	<p>【個別事例への対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケアマネが中心となり、対象者の人となりをよく知る親族や支援者を参集して対象者の思いを考る意思決定支援にかかるケア会議を開催する。 ・かかりつけ医が居ないため、専門医(精神科)の受診につなげていく。 <p>【抽出された課題】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 意思決定支援(アセスメントツール等を含めた)にかかる普及・啓発活動 2. 終活を早期に行っていくことに関する普及・啓発 3. ACPに関する普及・啓発活動 4. 関係機関とのネットワークの拡充・強化(緊急時の対応等含む) 5. 地域での緩やかな見守り体制の継続(構築)
第2回	R5.6.29	釜石	青葉ビル研修室1・2	町内会長、民生委員、主任児童委員、復興住宅自治会長、釜石小学校大町地区PTA、県立釜石病院退院支援看護師・医療社会事業士、小規模多機能ホームやかた管理者・CM、釜石市社会福祉協議会指定居宅介護支援事業所CM、あゆみ居宅介護支援事業所CM、生活支援Co、包括ケア推進本部職員、応援センター所長・保健師、包括スタッフほか 計22人	<ul style="list-style-type: none"> ・81歳(女性)1人暮らし 要介護1 ・対象者は、認知症を患い1人暮らしが困難になったことから、小規模多機能ホームのサービスを利用するようになった。 ・対象者は元気なときに地域の見守り隊や健康体操への参加等、地域活動に積極的に関わっていたが、認知症の進行により地域との関わりが薄くなってしまったと本人が感じている(実際には地域の方達からの声かけはあるが、認知症のためそのことを忘れてしまっている)。 ・対象者が地域のなかで生きがいや役割を持ち、輝きを取り戻すためにどのような関わりを持っていけばよいか。 	<p>【個別事例への対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象者の地域参加及び震災やコロナ禍で希薄になった地域のつながりを再構築するため、応援センター、町内会、復興住宅の自治会、PTA、介護事業所等で子どもと高齢者が集まる場の創出について協議を実施する。 <p>【抽出された課題】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 働いている世代(現役世代)に対する認知症の普及啓発 2. 震災やコロナ禍で希薄になった地域住民のつながり支援 3. 認知症の方の地域活動の場の創出 4. 世代間を超えた関わり(交流)の場の創出 5. 関係機関とのネットワークの拡充・強化
第3回	R5.9.14	釜石	釜石市保健福祉センター9階研修ホール	民生委員、釜石厚生病院相談員、あゆみ居宅介護支援事業所CM、あいぜんの里指定居宅介護支援事業所CM、釜石市社会福祉協議会指定居宅介護支援事業所管理者・CM、釜石市社協指定訪問介護事業所、介護老人保健施設フレールはまゆり相談員、地域密着型介護老人福祉施設三峯の杜相談員、ふれあい機能訓練デイサービス管理者、介護リフォーム相談員、生活支援Co、包括ケア推進本部職員、応援センター所長・保健師、包括スタッフほか 計20人	<ul style="list-style-type: none"> ・94歳(女性)長男と同居 要介護2 ・長男が認知症を患った対象者に対して大声をあげたことを近隣住民が通報し、対象者が地域包括支援センターに保護されたことがある。 ・地域包括支援センターが介入後、ケアマネを中心として家族(長男、長女)と介護サービスに関する利用相談を行い、定期的なショートステイやデイサービスを利用するようになった。 ・対象者と家族(長男)が住み慣れた地域で暮らし続けるためにはどのような関わりが必要なのか。 ・夫は仕事(漁業)を持っていることもあり、対象者の在宅復帰に迷いを感じている。 ・常に見守りが必要で、介護サービスでは生活を補えない対象者が地域で暮らすためのサポート体制はどのようなものがあるのか。 	<p>【個別事例への対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象者と同居している長男に寄り添う支援の実施、対象者の在宅復帰にかかる住環境の整備、ケアマネと地域包括支援センターが連携し、対象者と家族の希望に沿った支援を行っている。 <p>【抽出された課題】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 親と未就労の子供が居るケースへの対応が多くなっている(8050問題等、重層的な対応を必要とするケースに対する対応) 2. 親を介護する男性が思いを吐き出す場の創出(男性の居場所作り) 3. 認知症に関する普及・啓発活動 4. 関係機関とのネットワークの拡充・強化
第4回	R4.10.24	鶯住居	鶯住居地区生活応援センター多目的室	民生委員、町内会長、認知症サポーター養成講座修了者、釜石厚生病院医療相談員、いきいき指定居宅介護支援センターCM、ニチケアセンター釜石管理者、指定居宅介護支援事業所やまぎ管理者、あお空小規模多機能センター釜石管理者・介護スタッフ、生活支援Co、包括ケア推進本部職員、応援センター所長・保健師、包括スタッフほか 計22人	<ul style="list-style-type: none"> ・84歳(女性)夫との2人暮らし 要介護2 ・対象者は認知症が進行し、警察に保護されたり、妄想のような発言をするなど、認知症の周辺症状が現れてきた。 ・地区生活応援センターや地域包括支援センターが関わり介護申請等が行われ、介護サービス等を整えて自宅と施設を併用した生活を検討していたが、施設で強い介護拒否があったため、精神科に入院となった。 ・夫は仕事(漁業)を持っていることもあり、対象者の在宅復帰に迷いを感じている。 ・常に見守りが必要で、介護サービスでは生活を補えない対象者が地域で暮らすためのサポート体制はどのようなものがあるのか。 	<p>【個別事例への対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事例検討時には、対象者が市内の急性期病院に入院しており、在宅復帰のめどはないとの情報が入っていたことから、当該会議は地域課題を抽出に重きを置く形となった。 <p>【抽出された課題】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 震災前と震災後の見守り体制の変化に伴った関わり希薄さ(地域交流の機会の創出及び地域住民の情報伝達の方法の検討) 2. 利用しやすい集会所の設置(空き家等の利活用) 3. チームオレンジはまぼうふうの活用 4. 関係機関とのネットワークの拡充・強化